慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	批判的社会学の知識構造 : パラダイム概念を軸として
Sub Title	The structure of knowledge in critical sociology
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1980
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.20 (1980.) ,p.37- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000020-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批判的社会学の知識構造

——パラダイム概念を軸として——

The Structure of Knowledge in Critical Sociology

有　末　賢
Ken Arisue

The contemporary sociological theories, I think, come to "a turning point". In this paper, I call this condition "paradigm crisis", and analyze the structure of paradigm crisis. Then, for the methodology of critical sociology, I attempt an approach to our daily-world from the perspectives of knowledge and cognition.

First, the concept of paradigm, in "The Structure of Scientific Revolutions" (T. Kuhn), is examined, and the necessity of its extension is explained, for the concept of paradigm in his usage can not explain an interaction between science and society sufficiently. Therefore, secondly as a subject, the latest thought about science is treated. Here, I examine mainly sociology of science and philosophy of science, I think that it is "four stages" to approach to the knowledge of our daily-world. It is that the knowledge follows (1) a process of socialization, (2) a process of becoming a matter of course, (3) a process of social construction, and (4) a process of imagination.

Finally, our everyday life-world is analyzed from two points of view. One is the method of "The Social Construction of Reality" (P. L. Berger & T. Luckmann), the other is the communication between "meaning and structure". Thus, on the bases of "paradigm" and "paradigm crisis", I would like to emphasize that a critical sociology is a sociology as a paradigm of daily-world.

目　次

1. 序
2. パラダイム・クライシスの構造
　2.1. パラダイム概念の拡張
　2.2. 科学社会学と科学哲学
　2.3. 新しい知識社会学へ向けて
3. 知識と日常世界
　3.1. リアリティの社会的構成
　3.2. 「意味と構造」のコミュニケーション
4. 結語

1. 序

現代社会学の理論的状況は，一つの転換点を示しているように思われる。この転換点を本稿では，パラダイムの危機 (paradigm crisis) としてとらえ，そこから複数パラダイムの相互批判を「批判的社会学」(Critical Socioloky) として位置づけ，さらにその認識論的基礎を科学と知識の地平から見ていきたいと思う。従って，ここでとりあげる「批判的社会学」は単一のパラダイムを指すものではなく，「危機」という概念と結びついた理論的状況ないしは理論以前の「知識と認識」の問題にかかわってくる状況をとり扱っている。このように現代社会学理論の状況を「パラダイムの危機」としてとらえる視点は，相互に関連した次のような問題意識から発していると言えよう。

まず第一に，1960年代後半以後のさまざまな「社会問題」と密接に結びついた問題意識である。これは「専門

性への社会的批判」として通常パラダイムの中での理論枠組に異議を唱え，常に「何のための」という問いかけを内包したものとして位置づけられよう。第二にT. クーンの『科学革命の構造』(1962年) に端を発した，近代の科学・学問全体の問題状況からも「パラダイムの危機」が提起されている。この総体としての科学批判[1]の流れは，後に見ていくように知識社会学にとっての新しい課題を提起しているわけである。そして第三の問題意識としては，社会学理論内部での，さまざまな「批判的社会学」の台頭である。例えば，構造＝機能主義に代表される「アカデミック社会学」と国家社会主義の公的イデオロギーとしての「マルクス主義社会学」の双方の理論の下部構造 (Infrastucture) に注目して，危機の諸相をとらえていく A. W. グールドナー[2]や，資本主義の構造把握を古典理論へさかのぼって見ていく A. ギデンズ[3]や，現代社会の危機を多面的な視角から「正統化の問題」へとまとめていくフランクフルト学派の J. ハーバーマス[4]などがあげられるであろう。

2. パラダイム・クライシスの構造

2.1. パラダイム概念の拡張

社会学だけに限らず，広く社会科学，自然科学などの科学・学問を論じる際に，パラダイム (paradigm) という用語は，かなり定着しつつあるように思われる。私がここで，現代社会学の批判的考察のための方法論という問題に対して，パラダイムなる概念を中心的視座に置こうとする意図は，大きく分けて二つある。まず第一に，社会学方法論を知識社会学的観点からマクロスコープでとらえてみたいという点である。方法論的個人主義の発想も方法論的全体論の発想も，その方法論を採用する個々の研究者が，どのような研究者集団の中で科学活動を行なうのか，という知識社会学的関心が欠落してきたように思われる。その点をパラダイム概念で見ていきたいと思う。そして，第二に，批判的社会学の方法論にとって，まず現代社会学の諸々の理論を一度相対化してとらえる必要がでてくるのであり，その意味でパラダイムにまつわる認識の問題，世界像の問題が浮かび上がってくるのである。このような意図から，まずパラダイム概念の検討から始めていこう。

社会学の上でパラダイムという用語をはじめて使い出したのは，ロバート. K. マートンの『社会理論と社会構造』(1949年) における「分析的範例 (paradigm)」の用法であろう[5]。彼の「分析的範例」の社会学における使用の意図は，①機能分析のための暫定的方針の提示，②機能分析の根底にある公準や暗黙の仮定の導出，③政治的，イデオロギー的係わりあいの示唆[6]，という三点にあった。しかし，クーンとの関係で言えば，むしろ彼が「科学の社会学」(Sosiology of Science) という研究テーマの中で扱った「科学のエトス」という問題関心が注目されるのである。つまり，「科学のエトス」とは，単なる科学的方法のきまり，規則，原理というものだけではなく，それらを支える価値，信念をも含んだ複合的なものと考えられているからである[7]。

それでは，このようなマートンの考え方の延長線上に現在のパラダイム論が展開されているのかというと，そうではない。そこに，T. クーンの『科学革命の構造』の提起した問題があったわけである。この著書でクーンは，科学史上での従来の「累積による発展」という科学観に対して，非連続な「革命」による科学の歴史を説いている。それは，パラダイムの形成→通常科学への道→パラダイムの危機→パラダイムの変革としての「科学革命」→新しいパラダイムの形成という一連の「科学革命の構造」が示されるわけである。しかし，このような意図の上で通常引用される「一般に認められた科学的業績で，一時期の間，専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」[8] というクーンのパラダイムの定義を検討してみると，パラダイム概念をより拡張して考えていく必要性があるように思われる。彼は，「補章—1969年」で自らパラダイムの言葉を二つの異なった意味で使っていることを認めている。「一方では，パラダイムは，ある集団の成員によって共通して持たれる信念，価値，テクニックなどの全体的構成を示す。他方では，それはその構成中の一種の要素，つまりモデルや例題として使われる具体的なパズル解きを示すものであって，それは通常科学の未解決のパズルを解く基礎として，自明なルールに取って代わり得るものである。」[9] この引用の前者の意味では，パラダイムは社会学的なものであり，後者の意味では，哲学的なものであるということになる。そこで本稿では，クーンの使用したパラダイムの意味を「ある集団の成員によって共通して持たれる信念，価値，テクニックなどの全体的構成」という社会学的なものと再規定し，それと同時に，その「共有される信念，価値，テクニック」などを全体として「認識」の問題としてとらえてみたい。というのは，科学，学問の形成が，自覚的にパラダイムの形成であると同時に，科学者の認識そのものがパラダイム依存的であるからである。

2.2. 科学社会学と科学哲学

前節でとりあげたパラダイム概念の拡張によって，「科学」に対する見方は確実に変わってきたと言える[10]。ここでは，この「科学観の変遷」の問題を，最近の科学社会学，科学哲学の両面から見ていくことにしよう。

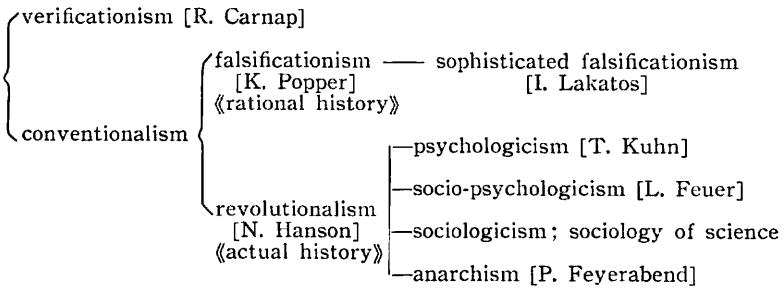
科学社会学 (Sociology of Science) という個別領域が現在，確固として築かれているわけではないが，現代の科学社会学の系譜を見ていくと，伝統的には二つの方向からの継承があり，それに対して，現代特有の第三の領域が入ってきているという状況であろう。つまり，二つの方向とは，科学史の流れと知識社会学の伝統であり，これに対して，現代特有の第三の特徴とは，社会問題としての科学技術，つまり科学の社会的責任という問題である。まず，「科学を社会事象として眺め，科学の社会的性格，ならびに科学と社会との相互関係を研究する社会学の一部門」[11] である科学社会学のアプローチのしかたには，「科学の社会的機能」を問う《科学から社会へ》の関係づけと，「科学の社会的規定条件」を問題とする《社会から科学へ》の関係づけの二方向が論理的に区別できる。しかし，最近の科学社会学の研究関心は，このような《科学から社会へ》，《社会から科学へ》という関係づけを明らかにするためには，科学自体を一つの社会的実在としてとらえていく《社会としての科学》を問題にしていかなければならないという方向へ向かってきているのである。

このような科学社会学の類型と推移は，前述の系譜とも一致してくる。つまり，《科学から社会へ》という視点は，内部科学史の流れを代表しており，《社会から科学へ》という見方は，マルクス主義，及び知識社会学の伝統を根源にしていると考えられる。それに対して，《社会としての科学》という考え方は，クーンの「科学者集団 (scientific community) によって担われるパラダイム」という指摘以来，科学者集団そのものを社会としてとらえ，科学と社会との現代的課題を提起しているように思われる。従って，この《社会としての科学》という視点に立つ科学社会学の問題提起は，クーンのパラダイム概念をより拡張した形で，近代科学，現代科学の「制度化」，「体制化」という問題を指摘していくわけである[12]。

以上のような科学社会学からの問題提起は，従来の「普遍性」「客観性」「公有性」などの価値基準に基づいた科学観に対して，現実に行なわれている科学活動の社会科学的環境[13]を取り出したものとして「パラダイム・クライシスの外在的構造」と名付けることができよう。これに対して，もう一つの科学哲学からの「科学の客観性」への批判は「パラダイム・クライシスの内在的構造」と名付けられるものである。

この科学哲学，科学方法論の類型と推移を図示してみると，第1図のようになる。つまり，いわゆるカルナップ的科学観では，科学理論の法則体系の中心を「経験的検証に基づく帰納的対応規則」と位置づけた点で，検証主義 (verificationism) ないし帰納主義 (inductionism) と名付けられる。これに対して，ポパーの「反証可能性」の理論や，そのポパーをも含めた広い意味での帰納法に対する批判としてハンソンが提起した，観察データの「理論負荷性」(theory-loadennes) の議論は，規約主義 (conventionalism) として位置づけられる。規約主義とは，おおよそ，科学理論の体系とは，われわれの何らかの規約化された理論系に基づいて構成されている，という考え方を指す。しかし，この「規約」という考え方にも，ネガティヴな帰納法としての「反証」を重要視するポパー，ラカトスの線では，「批判的合理主義」の名が示す通り「合理的な歴史」が基調をなしているが，ハンソン，クーンらの革命主義 (revolutionalism) では，歴史の合理的再構成ではなく，「実際の歴史」において何が起っていたかがより重要な問題となってくるのである。

この科学の「革命史観」の立場から提起された問題



第1図　科学哲学の系譜と類型[14]

は，およそ三つのポイントを持っている。第一に，ハンソンの「データの理論負荷性」の議論から，事実による理論（ないし仮説）の検証（ないし反証）はありえないとされ，広い意味での理論，あるいは認識のパラダイムの重要性が浮かびあがってきた点である。そして，第二には，クーンによって提起された「科学者集団内部でのパラダイムの転換」を「改宗」(conversion) の問題として位置づけることから，そこに科学理論と科学者の心理構造，科学者集団の社会心理学的分析などが問題となってきた点である。これは科学史・科学哲学からの科学社会学への接近として考えられる。そして第三のポイントとしては，クーンとファイヤアーベントが主張した，科学理論の「共約不可能性」(incommensurability) という点である。この科学理論の共約不可能性というのは，二つの歴史的に連続する理論系，通常は包摂・被包摂の関係で結ばれると考えられる二つの理論系の間にさえ，意味論的な不連続性を認め，その間に共約は不可能であり，根本的に革命的な断絶が設定される，というのである。そしてこの共約不可能性の議論を推し進めていくと，ファイヤアーベントは，革命主義よりも，知識の「アナーキズム」[15] へと向かい，科学理論の完全な相対主義 (relativism) を主張することになるわけである。そこで，これらの科学論からの問題提起を受けて，もう一度「批判的社会学の知識と日常世界」の問題を検討していくことにしよう。

2.3. 新しい知識社会学へ向けて

今まで，現代社会学理論の批判的考察のために「パラダイムの危機」という問題を，科学論を一つの題材として見てきたわけである。方法論を，その内在的同義反復（トートロジー）に陥ることなく，常にその方法論を支えている構造的視点からとらえ直していこうと考えて，科学論を追ってきたのであるが，その社会学的な意味は，「科学としての社会学」の問題と「科学の社会学」の問題とを同時平行的に見ていくための視点を獲得したかったからである。「科学としての社会学」という場合，社会科学方法論に視点が集中されやすく，その場合の「科学」をどうとらえるかという問題が脱落しやすいと思われる。また逆に「科学の社会学」の場合には，社会学的な方法の問題が，問われない前提として残ってしまう。もう少しはっきり言えば，「科学としての社会学」の「科学」が客観性基準に重点を置き，「科学の社会学」と言った時の「科学」が主観性，少なくとも社会的構成物として主観性の基準に重点を置いてきたと言える。このような両者の相互関係を同時平行的に，複眼的にとらえていく方法が必要とされているのではないか，そう考えてみたのである。そこで，今までの科学論を下敷きとしながら，社会学が，そして社会学者が，科学者集団の中にあって，どのように知識を批判的に行使していくのかという，「新しい知識社会学へ向けての四つの段階」を設定してみたい。ただし，この四段階は決して発展段階としてのみ位置づけられるわけではなく，重層的，複合的な「認識のプログラム」として位置づけられるのである。

(1) 知識の社会化過程

まず第一の段階は，現実の科学研究に従事しようとする段階である。この知識には，すでに「認識のパタン化」[16] や「知覚の風景」[17] としての要素は含まれているが，それがある一定の学的パラダイム（クーンが後にパラダイムの用語を撤回して，「disciplinary matrix 専門母体」という用語に置き換えているが，その意味とほぼ同じ）に属しているという意識は存在しない。この段階は，自然科学では非常に短く，ほとんどは理科教育，科学教育の過程の中で知らずに通り過ぎていく。しかし，社会科学にあっては，かなり長期化され，かつ研究活動が進んでいった際にも再度，そこにひきもどして考える事が可能，否重要でもある。この点は，後に「知識と日常世界」の問題として検討されることになるであろう。しかし，自然科学でも，「危機中のパラダイム」にあって，突如，ほんの素朴な「直観」や疑問から解答への手がかりが得られることもある。このような段階を，すでにそこにある知識と世界という意味で「知識の社会化過程」と呼び，また言語的には，圧倒的に日常言語の世界として成立しているわけである。

(2) 知識の自明化過程

次に第二段階としては，学的パラダイムに属して科学研究に従事する段階がくる。ここでの自然科学と社会科学，人文科学との相違は決定的である。自然科学における「問題解き」は，既存のパラダイムの上に乗らなければ謎が解けないのである。従って，ここではほぼパラダイム依存的である。それに対して，社会科学の領域では，既存のパラダイム（もちろん，自然科学と比較した場合，パラダイムとしての確立度は低いが）を相対化して見る傾向が早くから現われる。しかし，この相対化の傾向も，学的パラダイム内に限られることから，急速な細分化，専門化を呼ぶことになる。自然科学では，科学的知識と社会活動とは切り離され，否定されるが，社会科学でも，知識の社会化は自明視されて改めて問われることはない。従って，この段階を知識社会学的には「知

識の白明化過程」ととらえることができる。そして言語的には，理論言語一元化の動きが，一つの「隠語(jargon)の世界」を形成することになるのである。

(3) 知識の社会的構成過程

このような段階に対して，第三の段階は，言うまでもなく「パラダイムの危機」である。この点については自然科学を念頭に置きつつ，「科学論」として今までに検討してきたわけだが，要するに「危機」の持つ意味は，科学活動がそれ自体で閉鎖的に自足されることは決してない，という認識に至ったことであろう。このような認識は，科学社会学から提起された「現実の科学活動の社会科学的環境」という視点と，科学哲学の革命主義から提起された「科学方法論の人間的構造」という視点の両方向から照らし出された「危機の構造」なのである。これに対して社会科学における「パラダイム・クライシス」は，第二段階で指摘したパラダイムへの相対化の視点が発端になってくる。例えば，各学問分野における「西欧中心主義」とそれへの批判という動向を考えてみると，相対化の視点の度合いが見えてくるように思われる。つまり社会科学では，学的パラダイムの形成が弱い故に，研究活動は直接社会的性格を帯びたものとして，パラダイムの危機に直面するわけである。これに対する「反応」もさまざまである。危機が学的パラダイムの形成不備に起因すると考える人々はより強固なパラダイム（通例は，自然科学）の方法を借りてきて，パラダイムを補強しようとするし，学的パラダイムそのものを問題視していく立場の人々は，日常的世界へと視点を移していく。従って，この段階では，科学の総合化の動きが目立ってきて，細分化され，専門分化した学問を総体として社会と連繋させようという志向が見えてくるのである。そこで，これを「知識の社会的構成過程」の段階と呼ぶことにしよう。そして言語的には，理論言語が日常言語に歩み寄りを示して「社会的言語の場」で物を見ていこうという段階になってくるのである。

(4) 知識の想像力の過程

最後に，第四段階としてパラダイム・クライシスを乗り越えようとする批判的知識の段階が設定できる。この段階では，再び自然科学と社会科学の間の差異よりも，むしろ科学活動全般を問題とする志向が強くなってくる。それは端的に言って，科学研究という人間の営みを全体としての〈人の生き方〉に結びつけることであり，世界とのかかわり方一般が問題となってくるわけである。このパラダイム・クライシスの乗り越えに際して，自然科学の部門でも，学的パラダイムを相対化すると同時に，科学研究行為がそのまま社会的活動であるような「批判的科学」[18]の運動へと目を向けるようになる。自然科学の中での多様性は，例えばAT (Alternative Technology) やエコロジー運動（ムーヴメント）に触発されながら，もう一つの科学やエスノ・サイエンスという考え方の中に展開されてきているのである。また社会科学の場合にも，基本的には一致している。ただ，自然科学が批判的科学として「問題解き」の職人仕事を発揮するのに対して，社会科学は，いわば認識の原点である「想像力」に負うところが多い。つまり第四段階は，自然科学も社会科学も第一段階の「日常的生活世界」にひきもどして考えてみる事が鍵になるのだが，社会科学の場合には，その度合いがより強いと思われるのである。そこで，この最後の段階は，知識社会学的には「知識の想像力の過程」ということができよう。この点を言語的に見れば，日常言語をもって，創造的に科学するということになるのである。

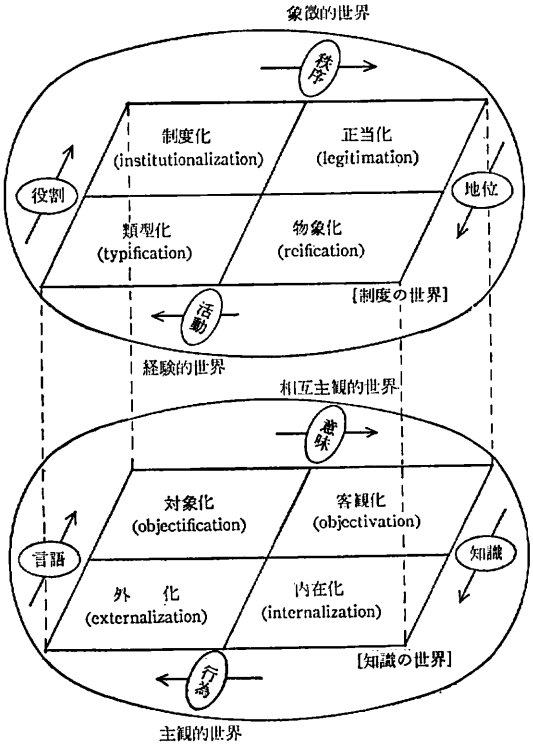
このような，新しい知識社会学へ向けての「四段階の構想」は，批判的知性発見の過程であり，認識論 (epistemology) と深くかかわった，「ものの見え方の転換」，「視点の移動」という問題を含んでいると考えられる。しかし，この転換はそう簡単なものではない。科学と技術の問題を一貫して人間と社会の側から追求している中岡哲郎は，そこのところを次のように述べている。「物が見えてくるためには，暗闇の中にさけ目のような感覚としてみえている疑問にこだわりつつ，お前はつまらないことにこだわるな，お前のこだわっていることの意味はこうなんだと，古いパラダイムによりながらいとも簡単に説明を与えてくれる親切な人びとの声を執拗にはねのけつつ，その疑問にふれてくる事実にしがみつき，事実の連関を追いつづける試行錯誤をはらんだ過程が必要である。」[19] つまり前述した知識社会学へ向けての四段階も，当然試行錯誤によって，行きつ戻りつしなければならないのである。科学活動とは，常に「ものの見えてくる過程」というわけではない。そこには常に「見えなくさせる構造」が罠を張っているのである。以上，今まで見てきた知識社会学へ向けての批判的方向づけは，決して単純な発展段階によって形作られるものではないし，過去のアンシャン・レジームに所属するパラダイムを簡単に棄て去ることでもない。それは，重層的で複合的であり，試行錯誤による難渋の一歩であろう。しかし，まさに，現代社会はその一歩を必要としているように思われる。

3. 知識と日常世界

3.1. リアリティの社会的構成

今までのところで，批判的社会学の方法論としてパラダイム概念を中心としながらその知識構造を見てきたわけであるが，それは基本的には「社会学的世界」からの視点であった。しかし，結論的に見えてきた「新しい知識社会学」でも触れたように，決定的に重要になってくるのは，日常世界からの知識構造である。この問題を本節では，現象学的社会学の「社会的構成」(social construction) 概念から見ていき，次節では構造主義などの視点をとり入れながらコミュニケーションの問題を扱っていくことにしたい。まず，日常世界の知識構造を「リアリティの社会的構成」として把握するバーガー，ルックマン及び下田直春の「知識のサイクル」の図を基に図示してみよう[20]。(第2図参照)

この図式は，「日常世界のリアリティが社会的にどのように構成されているのか」という設問に対する一つの視点からの仮説を示している。そこで，この仮説をバーガー・ルックマンの叙述を追いながら見ていくわけだが，彼らの用語の概念には多義的なものが多く，特に「制度化」や「正当化」はこの図式よりも包括的な概念として使われている。しかし，ここでは一応この図式的仮説に沿って説明しておくことにしよう。



第2図　リアリティの社会的構成

まず，彼らは「リアリティの社会的構成」を「主観的現実としての社会」と「客観的現実としての社会」に分けて考えている。この二分は，まさに相互移行が可能な形で弁証法的に構成されており，知識社会学の中心的な問題もそこにあるわけである。彼らは，「知識社会学はまずなによりも，理論的なものであれ，前理論的なものであれ，人々がその日常生活で〈現実〉として〈知っている〉ところのものをとり上げなければならない。言葉をかえれば，〈観念〉よりも常識的な〈知識〉こそが知識社会学にとっての中心的な焦点にならなければならない，ということだ。」[21] と述べている。つまり，第2図で下の方は，「知識」のサイクルとして見ていけるのである。そして，リアリティの社会的構成は，主観的現実としての社会（それは，上―下方向で見れば下に位置し，近―遠方向で見れば手前側に位置する。），つまり主観的世界と経験的世界によってできている「知識の世界」と，客観的現実としての社会（同様に，上方，遠方に位置する），つまり相互主観的世界と象徴的世界によってできている「制度の世界」とによって基本的に構成されることになるわけである。そして，この全体が，前述した「パラダイムの危機」の際にも，常にそこに立ち戻って考えるべき「日常的生活世界」を表わしているのである。

そこで，まず「知識の世界」を見ていくことにしよう。そこでは，主観的な意味世界にある「私」の「意識の志向性」は行為を通して外化される。するとその行為は「知識の世界」の中では，この世界を言葉と言葉に基づいた認識装置によって対象化することにつながり，知識がこの世界を現実として理解することのできる諸々の対象へと整序するわけである。こうして，人間の活動の外化された創造物が対象化を通じて，「客観性」という意味的性格を獲得する過程が，客観化になるのである。そして，社会の中での個人は，このような客観化された知識を内在化する。すなわち，それは客観的な出来事が意味をもつという事の直接的な理解を提示しているのである。

そこで，目を「制度の世界」の方へ転ずると，まず「知識の世界」において客観化された意味が一つの橋渡しになって相互主観的世界へと移行してくる。そこでは，経験的世界における身体を持った人間の活動が起点

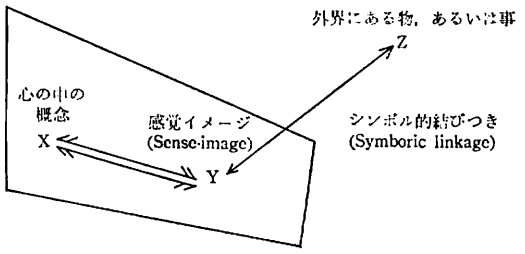
になり，その活動がすべて習慣化され，類型化されることから「制度」が始まってくる。そして，行為者が社会的に客観化された行動の諸類型に自己を同一化しようとするときに，「役割」の問題が起こってくる。すなわち，役割を遂行することによって，個人は社会的世界に参加するわけだが，行為者が役割遂行者として類型化されるや否や，彼らの行動は事実上，強制力の下に置かれることになる。つまり「制度化」が行なわれるわけである。このように制度化は，役割を制度的秩序の下に表現しており，次にくる制度的秩序を維持するという「正当化」の過程とは区別されているのである。この制度化を経た正当化によって，世界はさまざまな意味の領域が統合され，制度的秩序の象徴からなる一つの全体性，つまり象徴的世界へと包括されてくる。この象徴的世界における正当化の日常生活での表われは，地位というシンボルを生み出してくる。それはある意味で制度の世界が，どの程度非人間的な事実性として理解されるのか，つまり社会的現実の物象化に関する問題でもある。物象化とは　人間的諸事象をあたかも「物」であるかのように理解することであるが，そのような「制度の世界」の固化は，活動，役割，地位，そしてアイデンティティそのものまでにも及んでいくのである。

以上のような第2図の「リアリティの社会的構成」の見方は，常にそこにある日常世界を「一つの構成」としてとらえる視点を与えてくれるように思われる。つまり，パラダイムの危機を乗り越えようとして日常世界を見ていくと，そこにわれわれが通常自明視している世界が現われるのだが，その一つ一つには従来とは違った意味合いが内包されているのである。そこで，現象学的社会学の構成概念から見た方法論としては，〔言語―役割〕，〔意味―秩序〕，〔知識―地位〕，〔行為―活動〕などのセットを個人，集団，文化，社会などについて分析していくことから，日常世界がどのようなリアリティを共有しているのかという点が次第に明らかになってくるのである。

3.2.「意味と構造」のコミュニケーション

日常世界から見た「知識構造」はまず第一に「リアリティの社会的構成」としてとらえることができた。しかし，現実が「リアリティを持ったもの」として把握されるためには，単なる構成という静態的な反映概念だけではとらえそこなっているように思われる。動態的な「知識構造」を問題とするためには，意味の生産と再生産を含むコミュニケーション問題が重要になってくるのである。コミュニケーションの問題は，現象学的社会学やG. H. ミードなどのシンボリック相互作用論など社会学，社会心理学で以前から議論されていた問題であるが，ここでは特に「知識構造と意味」の観点から見ていきたいと思う。つまり，コミュニケーションが問題となるのは，それを通して意味の組み換えが起こるからであり，ある文化の自明性と他の文化の自明性との衝突が「知識構造」として内包されているからである。その点を構造主義人類学の視点をとり入れながら次に見ていくことにしよう。

E. リーチは『文化とコミュニケーション』(1976年) の中で，基本的に人の心の中にあるイメージとそれを概念として把握する際の結合媒体を人間のコミュニケーション事象 (Communication Event) としてとり扱っている。つまり，コミュニケーション事象とは，外界の事物，他者との間に限らず，一人の人間の内部でまさに構成される事象についても言えるわけである。そして彼は，このコミュニケーション事象を，隠喩と換喩，表出的行為の所産とコード化されたメッセージの解読という二つの軸に沿って，二対コミュニケーション (Communication dyad) として示している。そこにはリーチ独自の興味深い区分として，指標 (INDEX)―シグナル，記号 (SIGNUM)―自然の指標，シンボル―サイン，標準化されたシンボル―当座のシンボル，伝統的・恣意的シンボル―イコン，という二分が示されているのである。そして，コミュニケーションが成り立つ「認知の図式」を次のような図で示している[22]。

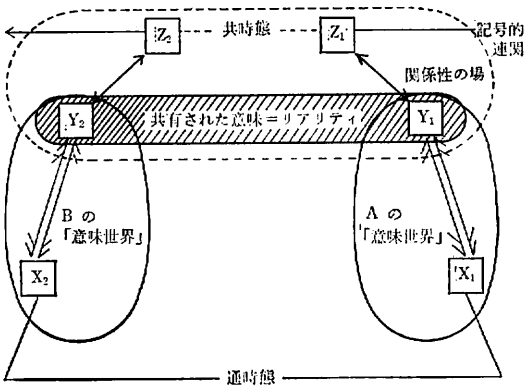


第3図　リーチの「認知の図式」

この第3図で注意しておきたい事は，心の中の概念Xと感覚イメージYとは，一人の心像の内部であるから，本来的 (intrinsic) な結びつきであるが，Yと外界にある事，あるいは物Zとの関係は恣意的 (arbitrary) なものとなるという点である。そこでZとYとの関係こそが，リーチの言うところの「シンボル的結びつき」になるわけである。そして，そのシンボル的結びつきは，慣習的なしきたりによって確立されているということにな

る。この「慣習的なしきたり」とは，自己の属する文化の「認知図式」を意味している。従ってコミュニケーションの問題は，従来考えられてきたように，個人の内面からの概念を，外界にある言語および非言語的事物を通して表出する行為としてではなくて，すでに，その文化の中で習慣化された「シンボル的結びつき」を共有することによって，意味が解読され，コミュニケーションが行なわれるのである。つまり，「シンボル的結びつき」を共有する，その共有のしかたこそ「知識構造」を表わしていると言えよう。また，第3図において注目すべきもう一つの点は，感覚イメージYの重要性である。心の中の意味世界にあって，他者と共有されているイメージがなければコミュニケーションは成立しないと考えられる。この点は，共通感覚，イメージと了解の問題として最近注目されている面でもある[28]。

さて，以上のようなリーチの認知図式を使って，「構造と意味」の問題をシンボル的コミュニケーションとして把握してみたのが，第4図に示したものである。まず，Aの「意味世界」とBの「意味世界」とは，感覚イメージYを通じて，共有された意味すなわちリアリティを持たない限り，基本的には「異世界」を形成している。従って，シンボルとしてのZ（言語及び非言語的事物）が例え同じであっても，その上層部の記号的連関だけを見ていては，コミュニケーションの核心に触れることはできない。つまり，同じ言語を用いても，意味世界として成り立つ「文化とコミュニケーション」は異なったものであるかもしれないし，また，異文化の理解がまず言語を通して学ぶにしても，それは未だ記号的連関の段階にとどまっている状態だとも言えよう。この点について青木保は『文化の翻訳』(1978年）で「極端なことをいえば，個人を理解するためには，その個人とことんまで付き合うことによって相互理解のコレスポンダンス（交感）がついに瞬時においても成立するところまでゆかなければならないであろう。」[25] と述べているが，それは「異文化理解」の一つの前提ともなってくるであろう。



第4図　シンボル的コミュニケーション[24]

しかし，もう一つ重要な事は，シンボルZを通しての「関係性の場」が共時態としてそこに存在している点である。例えば，象徴体系（シンボリシステム）として見ることのできる，通過儀礼や祭という「関係性の場」でもって，シンボルが意味しているコミュニケーション的要素も通時態を通しての共時態，つまり「構造」という観点から見ていけるわけである。第4図で，記号的連関としての $Z_1(\rightarrow Y_1\rightarrow X_1)\rightarrow$ 通時態 $\rightarrow(X_2\rightarrow Y_2\rightarrow)Z_2$（共時態としての $Z_1\leftrightarrow Z_2$）という一連の流れを「構造」と定義できるのではないだろうか。つまり，共有された「意味」を媒介としながら，時間的流れとしての「歴史」を，空間的（非時間的）な「人類」という概念で把握する事こそ，真の意味での「構造」の概念であろう。

このようなシンボル的コミュニケーションの図式から，「構造」が共有された「意味」を媒介としながら，関係性の場の中で再生産されるという動態的な視点を持つことができたのである。その際，個人あるいは集団の「意味世界」というものは，必ずその成立の根本から，他者との共有された意味＝リアリティの社会的構成を内包しているわけであるが，それと同時に，「異世界」として衝突し合う部分もあるのである。その意味の衝突に伴う知識構造の組み換えこそが，批判的社会学のための一つの方法論を与えてくれるのではないだろうか。

4. 結　　語

これまで「批判的社会学の知識構造」と題して，現代社会学理論の状況が「パラダイムの危機」にあるという認識の下に，その危機の構造を複数パラダイムの相互批判という「批判的社会学」の「知識構造」から見てきたわけである。要するに，まず現代社会学の理論が社会的問題状況のただ中にあって，果たすべき責任を果たしていないのではないか，という問題意識から出発し，その状況を「パラダイムの危機」と置いてみたのである。そして，そのパラダイム概念を軸としながら，漠然と考えている「批判的社会学」にとって何が問題となってくるのか，そしてそれをとらえるための方法は何か，という観点から本論において二つの方法論を仮説として提示してみた。第一のルートは，パラダイム概念を追っていくことから出発し，科学論を題材としながら，科学と社

会，科学と人間との密接な結びつきを明らかにしようとしたのである。そして，そこから取り出した私なりの「認識のプログラム」を新しい知識社会学へ向けての四段階として構想してみたわけである。そして第二のルートは，この第一のルートによって明らかにされた「科学がいかに日常世界に根をおろし，日常世界から物を見ているか」という点を出発点にしている。そして，その日常世界を成り立たせている「知識構造」を「リアリティの社会的構成」という視点と「意味と構造のコミュニケーション」という視点の両面から仮説化してみたのである。

従って，実は「批判的社会学」の方法論として問題としてきたのは，「理論の方法論」以前の，あるいは理論をも包括する「認識と知識」の方法という，きわめてエスノ・サイエンスやフォークロア的な方法論に近づいてきていると言えるのである。そこにこそ「日常世界のパラダイム」としての社会学が必要になってきているのである。

註

1) 中山茂「最近10年の科学と社会」『科学』1979年1-3, 5, 6, 8, 9, 11月号。
2) Gouldner, A. W., "The Coming Crisis of Western Sociology" An H-E-B Paperback 1970 (岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』新曜社・1974年)。
3) Giddens, Anthony, "New Rules of Sociological Method" Basic Books New York 1976.
4) J. ハバーマス(細谷貞雄訳)『晩期資本主義における正統化の諸問題』岩波現代選書・1979年。
5) ロバート.K.マートン（森東吾他訳)『社会理論と社会構造』みすず書房・1961年。
6) 同上，p. 49-50。
7) 同上，p. 495。
8) Kuhn, Thomas, S., "The Structure of Scientific Revolutions" The Uniuersity of Chicago 1962, 1970 Preface viii (中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房・1971年，まえがき iv。)
9) ibid., Postscript-1969 p. 175 (邦訳 p. 198)。
10) 柴谷篤弘『あなたにとって科学とは何か』みすず書房・1977年，高木仁三郎『科学は変わる』東経選書・1979年など。
11) 新堀通也『日本の学界』日経新書・1978年 p. 174。
12) 広重徹『近代科学再考』朝日選書・1979年。
13) 村上陽一郎「自然科学の社会科学的環境」早坂忠他編『経済学の知性史的考察』東洋経済新報社・1979年。
14) 第1図は村上陽一郎『科学と日常性の文脈』海鳴社・1979年，p. 175 から verificationism だけ付け加えて引用した。なお，ここでの論旨は他に黒崎宏『科学と人間』勁草書房・1977年にも多くを負っている。
15) Feyerabend, P. K., "Against Method: Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge" in "Minnesota Studies in the Philosophy of Science Vol. IV" 1970, p. 17-130.
16) 渡辺慧『認識とパタン』岩波新書・1978年。
17) 沢田允茂『認識の風景』岩波書店・1975年。
18) Ravetz, J. R., "Scientific Knowledge and its Social Problems" Penguin University Books 1971. (中山茂他訳『批判的科学』秀潤社・1977年。)
19) 中岡哲郎「もののみえてくる過程」『展望』1975年3月号，p. 50。
20) 第2図は Berger, P. L. & Luckmann, T., "The Social Construction of Reality" Penguin Books 1966 (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社・1977年) 及び下田直春『社会学的思考の基礎』新泉社・1978年 p. 153 の図4を参考にして作成した。
21) Berger & Luckmann, ibid., p. 27 (邦訳 p. 24).
22) Leach, Edmund, "Culture and Communication" Cambridge University Press 1976, p. 19.
23) 藤岡喜愛『イメージと人間』NHK ブックス・1974年，中村雄二郎『共通感覚論』岩波現代選書・1979年など。
24) 第4図は，リーチの他に宮家準「民俗宗教の象徴分析の方法」(藤田富雄編『講座宗教学④秋められた意味』東京大学出版会・1977年，p. 197) を参考にした。
25) 青木保『文化の翻訳』UP 選書・1978年，p. 79。